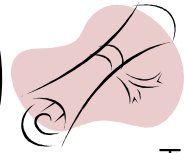


図書館だより



No. 10

平成 26 年 2 月 25 日

ソチ・オリンピックに沸いた2月もあと僅かです。日本人選手の活躍に日本中が歓喜、感動し、テレビから目が離せない日が続きましたね。競技だけでなく、幻想的な開会式も印象に残りました。

また今月は20年ぶりと言われた大雪に2週連続で見舞われ、その雪の量に様々なところで混乱が起き、雪の怖さを知った月でした。こんなにたくさんの雪に囲まれたのは初めての経験だった人も多いかと思いますが、怪我などしなかったでしょうか。

さて、3月は3年生の卒業式、2年生の修学旅行、1年生の長距離歩行と各学年ともに大イベントが待っています。それぞれの学年の締めくくりとなるイベントです。気持ちをひとつにして、よい思い出を作ってください。図書館では、修学旅行の展示を行っています。オーストラリアのガイドブックだけでなく、歴史や文化、暮らしなどがわかる本も揃えてあります。初めての海外旅行となる人も多いかと思うので、事前準備をしっかりと当日に備えてください。

*雪の楽しみ方

451-リ『スノーフレーク』 ケネス・リブレクト || 著 山と溪谷社

小さいながらも繊細で美しい雪の結晶。空から降ってくるふわふわの雪をよーく見てみると、肉眼でも結晶の形を確認できます。その神秘的な結晶の世界に心を奪われてしまう1冊です。空気中を降ってくるものを一つずつとらえて、すぐさま撮影したという結晶の写真の数々は、宝石みたいに綺麗でいつまでも眺めていたくなります。結晶の形や名前など、初めて知ることが多く、読んでいてとても新鮮です。

また、コラムでは「なぜ結晶は透明なのに雪は白く見えるのか」や「私たちの体から蒸発されている水分が結晶の一部になっている」など、おもしろいコラムも載っています。

*楽しく歩こう

782-ウ『これで身も心も軽くなる！ウォーキングの基本』 JTBパブリッシング

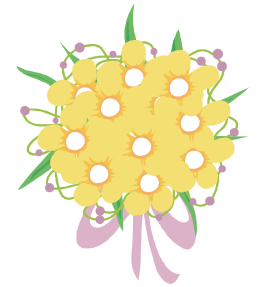
せつかく歩くのなら、正しい歩き方を身につけて、健康な体作りに生かしていきたいものです。この本では、歩き方の基本となる姿勢や体の運び方、呼吸法などから始まり、ウォーキングの楽しみ方や、歩くことによって得られる健康効果など、「私もウォーキングを始めてみようかな」という気持ちにさせられるいいこと尽くしの魅力がたくさん紹介されています。

また、ウォーキングのための靴やウエアの選び方も載っているので、興味を持った人や長距離歩行で歩く楽しさに目覚めた1年生はこれを参考に本格的にグッズを揃えてみるのもよいでしょう。



贈る言葉に代えて

まだ少し早いです、3年生のみなさん、卒業おめでとうございます。これがみなさんに読んでもらう最後の図書館だよりです。最後は旅立ちを前にみなさんに読んでほしい本を紹介したいと思います。本の中では様々な言葉がみなさんとの出会いを待っています。心を癒してくれる言葉、ワクワクさせてくれる言葉、感動で胸いっぱいにしてくれる言葉、たくさんの言葉に触れ、より素敵な人生を送ってください。



748-オ『DREAMS』 大脇 崇 || 写真・文 サンクチュアリ出版

“1人ひとりが、いろいろな夢を描きながら生きている”

世界中の子どもたちの夢と笑顔が詰まった写真集です。生まれた国や地域によって、暮らしの環境は違いますが、夢を語るどの子の笑顔もキラキラと輝いていて、その夢が叶ってほしい、叶えられる世の中であってほしいと心から感じます。

夢を追いかける途中で、不安になったり、くじけそうになったりした時には、この本を開き、励まされてほしいと思います。きっと、夢は輝きを取り戻し、「頑張ろう！」と気持ちも上向くはず。みなさん1人ひとりの夢が叶うことを願っています。

914.6-オ『きれいな色とことば』 お一なり 由子 || 著 大和書房

“ほんとうに、ほんとうにいつも太陽はやってくる。”

お一なり由子さんの言葉はとても優しいです。読んでみると、心がほぐされていくのを感じて、「自分でも気づいていなかったけど、疲れていたんだな」とわかります。この本は、お一なりさんが日常生活の中の色をテーマに書いたエッセイ集です。読んでみると、何気ない日々の中で感じた気持ちやふとした出来事を大切にしているのがよく伝わってきます。その中には自分の心にある言葉に表し切れない思いと重なるものがあって頷けたり、こんな風に自分の生活を些細なシーンまで楽しめるようになりたいなど憧れたりします。

289.2-ユ『わたしはマララ』 マララ・ユスフザイ || 著 学研

“ペンを奪われてみてはじめて、人は、教育がどんなに重要だったかに気づくのだ。”

2012年パキスタンでタリバンによって頭を銃で撃たれた15歳の少女がいました。名前はマララ。彼女の住むスワート渓谷は、名誉を重んじるパシュトゥン人が暮らす地上の楽園のように美しい観光地でした。しかし、タリバンがこの地を支配したことで人々の暮らしはどんどん制限を加えられます。音楽も踊りもテレビも、そして女の子が教育を受けることも。スワートの人にとってタリバンも政府軍も災厄で、平和への希望さえ見えません。殺されることを覚悟しながらも、すべての子どもは教育を受けられるべきだとの意見を発信したマララの、勤勉で勇敢な生き方をぜひ知ってください。

世界を旅する12ヶ月 ～オーストラリア～



「世界を旅する12ヶ月」第9回目は、オーストラリアです。これから、2年生が修学旅行で訪れる国でもあります。

首都はキャンベラ。国土の表面積は769万km²。これはヨーロッパ全土より広く、また日本の約22倍にもなります。

その広大な国土には、大サンゴ環礁帯のグレート・バリア・リーフ、14年という歳月をかけて完成したシドニー・オペラハウス、エ

アーズ・ロックの名で知られているウルル-カタ=ジュタ国立公園など、多くの世界遺産が存在します。

また、オーストラリアは移住者の受け入れを積極的に行ってきた国であり、その結果、様々な民族の暮らす国となっています。そのため、様々な国の文化が混じり合い、そこから新しい文化が生まれている他、使われている言語も20カ国語以上もあるのだそうです。

*オーストラリアの見どころは！？

297-コ『オーストラリア』 昭文社

オーストラリアといえば、カンガルーとコアラがパツと思ひ浮かびますが、それだけでなく本当にたくさん見どころがある国です。マリンスポーツやおいしい海の幸を堪能できるレストランが充実した海辺、大自然の作り出す絶景を楽しめる内陸、ショッピングやおしゃれなカフェ巡りのできる街々と、興味を惹かれる名所の多さにどこをどうやって旅したらいいのか悩んでしまいます。特にスケールの大きな自然の名所は写真で見ただけでもその美しさに心が癒されます。

ことりっぷシリーズのガイドブックはレイアウトや書き方がかわいらしく、女子の好きそうなポイントがばっちり押さえられた内容となっているので、このオーストラリア版も読んでいただけで、旅のわくわくを感じることができます。

*シドニーで活躍する日本人

596-ワ『TETSUYA シドニーテイスト』 和久田 哲也 || 著 柴田書店

世界にその名が知れ渡っているオーストラリアのレストラン「TETSUYA 's」。その「TETSUYA 's」をオープンさせ、オーナーシェフとして腕を奮っているのが和久田哲也さんです。

シドニーだけでなくオーストラリア中から入手させた最高の食材と、それを生かした最適な調理がほどこされた料理には、その味を求め、世界中から人々が訪れています。

本には今まで食べたことのないような料理が並んでいますが、そのどれもが美しく盛りつけられ、まるで写真集のようなレシピ本です。眺めていると、この料理の数々からは一体どんな味が醸し出されるのだろうと想像が膨らみ、食欲がどんどん湧いてきます。

予約でいっぱいだという憧れの名店の味を家庭でも再現できるという素敵な本です。

*オーストラリアの異邦人

913.6-イ『さよなら、オレンジ』 岩城 けい || 著 筑摩書房

異なった文化背景をもつ二人の女性が、それぞれ異国であるオーストラリアの片田舎の英語学校で出会います。一人は難民としてこの国にやってきました。最初は夫もいたのですが、彼女と子どもをおいてどこかへ行ってしまいました。生きていくために、働き、言葉を獲得しようと学校に通います。もう一人は、日常会話なら不自由なく使えるけれど、言葉で表現することにこだわる日本女性です。彼女は自分のキャリアをふいにして夫の転勤についてこの国にきました。そして、二人の物語はこの日本女性の紡ぐ物語にクロスします。異国・オーストラリアで言葉もわからずに生きる苦勞にまず興味がいきますが、読み込むほどに、思考や行動を決定する“力”＝“言葉”について考えずにはいられません。日々何気なく使っている言葉について、きっと振りかえってみたくくなります。

*オーストラリア×村上春樹

B913.6-ム『シドニー！ ①コアラ純情編』 村上 春樹 || 著 文藝春秋

2000年夏、シドニーで開催されたオリンピック。その時、村上春樹もオリンピック取材するため、オーストラリアにいた。トライアスロン、野球、サッカー、砲丸投げと時に鋭く、時に痛快な村上春樹の実況に合わせて、それぞれの試合を思い浮かべていると、シドニー・オリンピックを観戦しているかのようにおもしろいです。特に選手たちの心境に迫った描写にはグイグイと引き込まれます。

そして、合間に綴られているシドニー散策シーンでは、ガイドブックなどで知るのとは、また違った日常のオーストラリアが見えてきます。山火事に動じない住人との感覚の差に戸惑ったり、車で1日に1000キロの大移動をしたり、動物園で出会った奇怪な動物たちに釘づけになったり、『オーストラリアは地図で見て想像するよりずっと大きな国なのだ』という村上さんの一言が印象的です。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

今月は村山由佳さんの『青のフェルマータ(913.6-ム 集英社)』を読みました。この本も舞台はオーストラリアです。ある日を境に声を出すことが出来なくなった里緒。イルカとのふれあいが効果的な治療になると父に連れられてやって来たオーストラリアの島で1人暮らしを始める。イルカとのふれあいだけでなく、この島で里緒は、日に何度も泳いでしまう海、優しく頼もしい隣人のダグとアレックス、心の拠り所のような存在のJB、とたくさんの大切なものに出会う。それでも、声を取り戻すことはできない。「それでもいい」そう思える生活が続いたが、荒くれ者のゲイリーや野生のイルカ

の存在をきっかけにして、傷つき、傷つけながら、里緒は自分自身の本当の思いに気づいていく。その心模様に胸が痛くなったり、温かい気持ちをもったりしながら読み終わりました。そして、たくさんのものに心を惹かれました。青い空と海と音楽、そして、イルカ。読むごとに綺麗な景色が浮かんでいきます。

